

1. 調査の経過

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部は、昨年、藤原宮東面北門推定地に南接する地域において、宮東大垣とそれにともなう内濠・外濠等の発掘調査をおこなった(第24次調査)。本年は、引き続き、主として宮東面北門の位置及び規模と三条大路を確認し、あわせて昨年検出した「仗舎」あるいは「厩亭」と推定される建物の規模を明らかにする目的をもって、1979年9月7日より第27次調査を開始し、現在継続中である。なお、調査地は、藤原宮大極殿の東北約500mにあたり、調査面積は約2200 m^2 である。

2. 検出した遺構

調査によって検出した遺構は、藤原宮造営直前、藤原宮期、その他にわかれる。

〈藤原宮期の遺構〉宮東面北門、宮東大垣、内濠、外濠、掘立柱建物1、溝1、土壇1がある。北門(SB10)は、後世の削平のため礎石や基壇土は全く認められなかった。ただ、数ヶ所で根石が残っており、それによって、東西2間、南北5間の門が復原できる。柱間は約5.1m(17尺)である。宮東面大垣(SA175)は、門の南側で4間北側で1間分を検出した。柱間は約2.7m(9尺)で、いずれも東側に柱を抜き取っている。内濠(SD2300)は、大垣の西方約12mにある幅約2.5mの南北溝であり、外濠(SD170)は、大垣の東方約20mにある幅約6mの南北溝である。SB2290は、昨年検出した「仗舎」あるいは「厩亭」の続きで、今回の分とあわせて梁行2間、桁行7間南北棟掘立柱建物であることが判明した。SD2295は、大垣と外濠のほぼ中間に位置する南北溝で、宮の四周をめぐると思われる。SK14は、発掘区北西隅に広がる浅い土壇で、多量の瓦と土器を出土した。

〈藤原宮造営直前の遺構〉SB01は、SB2290の北にある南北棟掘立柱建物で、建物方位は北で西に偏している。梁行は2間、1.5m等間で、桁行は西側が2間、東側が3間で、柱間はそれぞれ2.4m等間、1.6m等間である。西南隅の柱抜き取り穴から土師器壺、甕が出土した。

〈その他の遺構〉SX02は、外濠の西岸に接した南北方向の柱列で、4間分を検出し

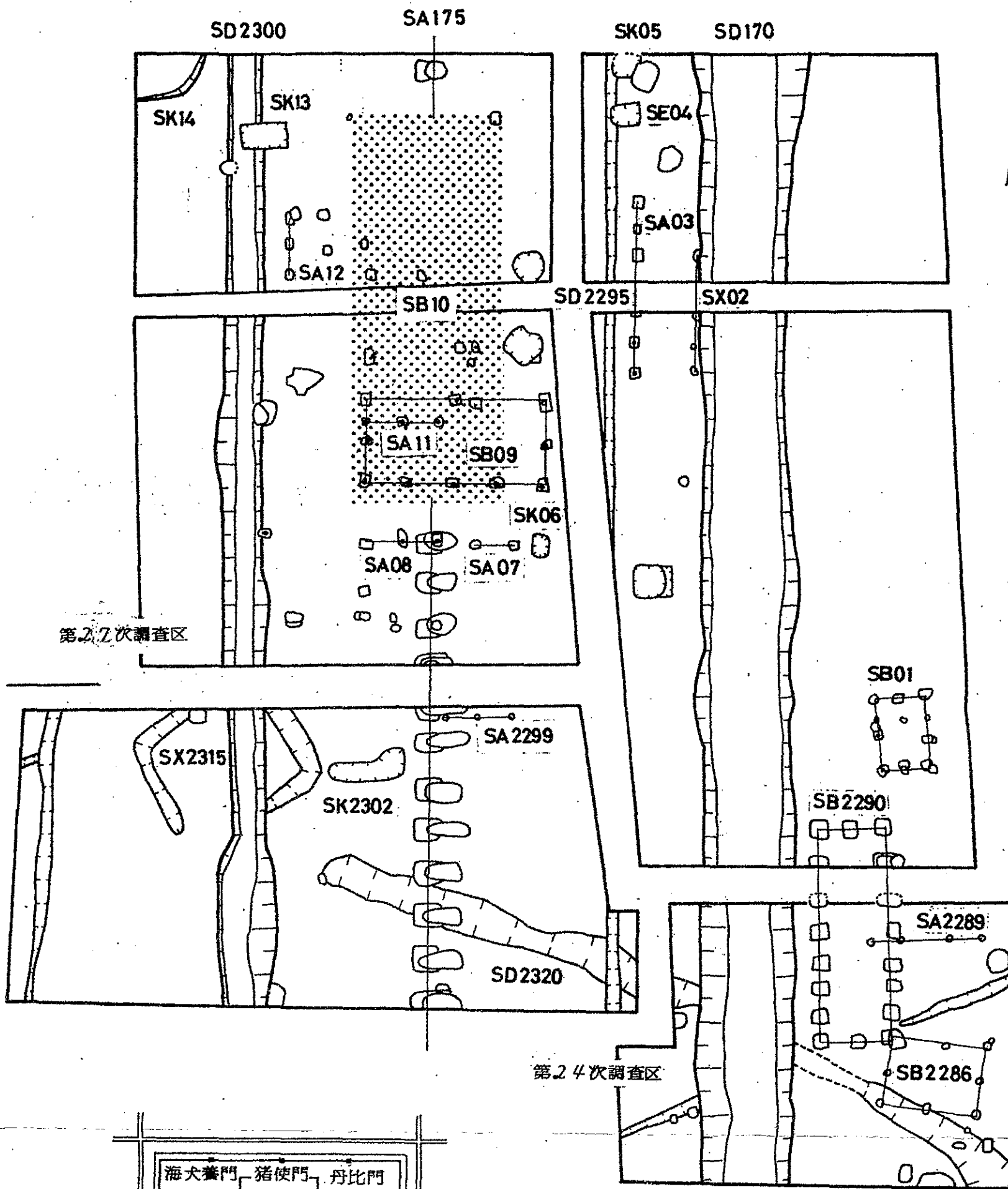
た。柱間は1.9m等間である。SA03は、SX02の西にある南北方向の掘立柱塀で柱間は1.8m等間、6間分を検出した。井戸SE04、土壇SK05は、いずれもSD2295と重複しており、藤原宮期以後のものである。SK06は、東西1.2m、南北1.5mの不整形の土壇で、つぎに述べるSA07と重複している可能性がある。SA07、SA08は、東西方向の掘立柱塀で、どの柱掘方にも柱痕跡または小規模な礎石をともなう。柱間はいずれも2.3m等間である。また、SA08の柱掘方の1つは、大垣の柱抜き取り穴と重複している。SB09は、門の部分に重複した南北2間、東西4間の建物で、柱間は、梁行2.7m等間、桁行2.8m等間である。建物方位は北で東に偏している。SA11も門の部分に重複する東西2間の掘立柱塀で、柱間は1.7mである。SK13は、西半部が内濠にかかる長方形の土壇で、東西3m、南北1.6mをはかる。

3. 出土遺物

完掘してはいないが、SD2300及びSD170からは、多量の土器と瓦が出土している。瓦類では、軒丸瓦6274 6276、6279型式、軒平瓦6646、6647型式が目につく。また鬼瓦では、昨年出土した三重弧文鬼瓦と同一個体の一部が出土した点が注目される。木簡は、現在のところ外濠から320点余出土している。荷札はすべて郡名表記で、特に「備前国」を「備道前国」という古様の書き方で記したものが珍しい。年紀のあるものは「和銅元年」が1点あり、文書の官司・位階・荷札の郡名表記などからみても、大宝令以後のもので、藤原宮時代の中でも新しいものである。ほかに蓮華と人物の墨画がある。この他に墨書土器、製埴土器、土馬などがある。

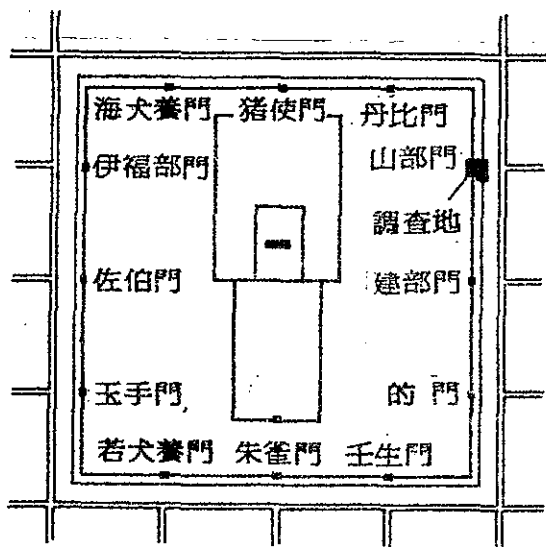
4. まとめ

北門は、遺存状況がよくなかったが、東西2間、南北5間の規模と復原される。柱間は北面中門と同じ17尺等間、大垣の取り付けも9尺とみて矛盾はない。なお三条大路及びその南北両側溝は、今後の調査にまつところである。



第2-7次調査区

第2-4次調査区



S D 一七〇 出土木簡

謹啓令忽有用処故箇
及末醬欲給恐之謹請馬寮

大伯郡長沼里
縣使部加比儀

内膳司解□□□□
□□□□^{料三斗}□□□□

安芸国安^{美郡}□□^里
倉椅部□□調^斗□□

□□^{七斗}位上当麻東人 引田□

津刀里津守連□

少初位上多治比橘連^連□麻呂
□麻呂 □多治比阿波連牧夫

加岐鯨

□□□ 和銅元年^五□□

備道前国勝間田郡
□部年□